

『徒然草』の研究—第五八段について—

● 土 屋 博 映

一 要旨

本段（第五八段）は、出家の重要性を主張する内容である。出家の重要性については、既に第四九段に記されているが、主張は本段に比較し、ずっとゆるやかである。本段は、大体は淡々と叙述する作者が、感情もあらわに出家を主張しているように感じられる。本稿では、本段の内容が感情的であることを確認し、何故そうなったのか、また兼好の俗世間との関係は、俗世間を否定するものとしても、出家まで必要としているのかどうか、必要としているなら、どのような背景があるのか、本段を中心に、出来るだけ根拠を持ち、論証してみた。その結果、本段の成立には第四九段が大きな影響を与えている。本段を書く発端になった、具体的に反論する人物の存在があり、それにより「出家」の重要性を強く認識するに至ったと結論した。

二 本文

- ①「道心あらば、住む所にしもよらじ。家にあり、人に交はるとも、後世を願はんには難かるべきかは」と言ふは、さらに後世知らぬ人なり。げにはこの世をはかなみ、必ず生死を出でんと思はんには、なにの興ありてか、朝夕君に仕へ、家を顧みる営みのいさましからん。心は縁にひかれてうつるものなれば、閑ならでは道は行じがたし。
- ②そのうつはもの、昔の人に及ばず、山林に入りても餓をたすけ、嵐をふせぐよすがなくてはあらぬわざなれば、おのづから世を食るに似たる事をも、たよりにふればなどかなからん。さればとて、「背けるかひなし。さばかりならば、なじかは捨てし」など言はんは、無下の事なり。さすがに「一度道に入りて世を厭はん人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、藜のあつもの、いくばくか人の費をなさん。求むる所はやすく、その心はやく足りぬべし。かたちに恥づる所もあれば、さはいへど、悪にはうとく、善にはちかづくことのみぞ多き。
- ③人と生れたらんしるしには、いかにもして世を遁れんことこそ、あらまほしけれ。ひとへに食る事をつとめて、菩提におもむかざらんは、万の畜類にかはる所あるまじくや。

※本文は『日本古典文学全集』（小学館）による。

※①～③の番号は、筆者が便宜的につけた。

三 本段の構成について

本文の注には、次のように記されている。

「道心あらば」以下の提言は、いちおう論理的で一貫しているように見えるが、現実的でない観念論にすぎないことを、兼好は鋭く批判する。兼好のいわばプラグマティックな思想は、後段においてさらに展開されていることを注目しよう。

注の「後段」というのは、本段の「後段落」ではなく、続く「第五十八段」のことを指すのであろう。「道心あらば～」以下の「 」という考えをもととし、それに反論することによって本当の「道心」とはどうあるべきかを考えているのである。

二において①～③と本文を三段落に分けた。その構成を見て行こう。

- ①「道心あらば、～」という考えを聞き、反論する。その根拠は末尾の「閑ならでは道は行じがたし」にある。
- ②俗世間を捨てて道を求めても、様々なことはあるが、それでもやはり俗世間を捨てることは、「悪にはうとく、善にはちかづくことのみぞ多き」とまとめる。
- ③「人と生れたらんしるしには、いかにもして世を遁れんことこそ、あらまほしけれ」が骨格。俗世間にいる人間は畜類と同じだとまとめる。

以上の構成をふまえて、次章で本段の内容を吟味していく。

四 本段の内容

第一段落からみていこう。

本段を兼好がまとめたのは、冒頭にあるように、ある人が「道心あらば、住む所にしもよらじ。家にあり、人に交はるとも、後世を願はんに難かるべきかは」と言ったことが発端である。これに対し、兼好は「さらに後世知らぬ人なり」とまさに一刀両断に否定している。

兼好が反論したのは、精神（道心）さえあれば、俗世間（どこに住んでもいいし、誰とつきあっても）にいても、極楽往生（後世）できるという点である。

「げには」という言葉は、内容的には、第一段落の最後「閑ならでは道は行じがたし」にまで力を及ぼしている。「この世をはかなみ、必ず生死を出でんと思」うというのは、いわゆる煩惱を断ち切ることを願うわけだが、もしそうだとしたら、「朝夕君に仕へ、家を顧みる営み」などできるわけがない、というのである。「なにの興ありてか」は相当強い否定的な表現である。

最後の一文は、兼好の主張したい内容である。

「心は縁にひかれてうつるものなれば、閑ならでは道は行じがたし」の、前半では、「心」は「縁」に左右されるものである、という。「縁」とは、自分が関わるもの、ととらえておきたい。つまり「心」は自分の環境に左右されるというのである。それを受けて、後半では「閑」、つまり環境を静かな状態にしないと、仏道は行えないと結論付けている。人間は、それほど「心」は強いものではなく、環境に左右されるというのは、彼の根本にある、人間論と言っていいたいだろう。

第二段落は、「そのうつはもの」で始まる。「その」は指示語である。全集の注には、後続の「昔の人に及ばず」と対比して、「その」を「今の」と解釈しているが、これはまさに「道心あらば」と発言した人物そのものを指しているのではないか。兼好の、本書における様々な主張は、ある特定の人物の行動や言動によって、喚起され、なされる場合が多々あるように思われる。第一段落の「道心あらば」以下は、かなり具体的に表現されているので、兼好が誰か身近な人物の発言を聞きとったものと考えるのが妥当であろう。したがって「そのうつはもの」は「後世知らぬ人」とするのがよいと考えられる。

五 『徒然草全注釈』について

ここでは、『徒然草』の注釈書として、もっともよりどころとなると思われる『徒然草全注釈』の見解（「 」内がそれにあたる）を参考に、自己の考えを述べることにする。

※番号・傍線部は筆者による

〔(1)この段の主題は、在俗者と比べて、出家・遁世して山林に住む生活がどんなに修行のために重要であるかを主張する所にある。そのため、第一段落では、「げにはこの世をはかなみ、必ず生死を出でん」と覚悟した上は「朝夕君に仕へ、家を顧みる営み」を捨つべきことを強調し、第二段落では、山林生活が修行にいかにかつ重要な要件をなしているかを、衣食住にわたって述べ、さらに「心」と「かたち」の上にも及んでいる。第三段落では、人間として、「世を遁れ」「菩提に趣く」ことの緊要さを力説して、前の二つの段落の主張の根底を明示している。(2)全体的に、仏道を第一義とする生活への帰入を勧める、強い道念によって統一されている段と言えよう。〕

(1)(2)ともに常識的なとらえ方で、とくに否定する部分はないのだが、「道心あらば、」という冒頭からは、冷静に、(1)(2)を主張しているとは思われない。

(1)では「主張」よりも「反論」といったほうが的確かと思われる。単純に、自分の主張をまとめるのではなく、とんでもないことを言う「愚か者」に対する、怒りをこめた反論というほうが正しいのではないか。「なにの興ありてか」という表現は、強い反論をこめた表現であり、そこに注目すべきである。

(1)同様に、(2)も「強い道念によって統一」は、結果的にそうなったのであって、兼好の主旨は、反論であったと、まずは読み取らねばならないだろう。

「これまでの段との関連から言えば、(3)第四九段に近い表現と言えらるが、そこでは、「無常」をいつも念頭に懸けておくことの必要を言っているのに、ここでは、修行者の山林生活を(4)同情と理解をもって直視し、それを(5)外部の非難から弁護している点が目立つ。これは、何と云っても、(6)兼好の内に、そういう遁世生活の経験を多少でも経た自信があったからに違いない。

(3)とあるが、第四九段は、実は本段とは似ても似つかない。第四九段は、観念的である。おそらく、彼の読書力等から身に付けた一般論として述べているだけで、迫力には欠ける。本段は、何と云っても、具体的な発言に対し、具体的に反論しているところにポイントがある。

(4)の「同情と理解」とは表面的な見方であり、それは単に結果的にそうなっただけである。

(5)に「外部の非難から弁護」とあるが、そうではなく「外部の非難への強力な反発」というべきである。

(6)は、前半はいいが、最後の「自信」は的確でない。「自信」があるならば、より冷静な記述ができるはずである。「遁世生活の経験」を否定されたことによる、反発がすべてであり、「自信」とはならない。

「この段には、また、(7)「後世」の語が二度使われていることによって、大体浄土教的信仰を立場としていることが知られる。こうした隠遁的浄土教は、平安朝期に起こり、幾つかの往生伝・説話集の題材となり、『撰集抄』『発心集』などにしばしばその修行者の行実を示して、鎌倉期にも長く伝統を曳いている。(8)長明の『方丈記』が、そうした隠遁者を代表する、深刻な文学作品たることはいうまでもない。そうした修行者は、一定の宗派に属さず、寺院内に起臥せず、職務に就くことなく、人家から離れた「閑居幽隠」の生活を送る場合が多かった。第一段に「ひたふ

るの世捨人」と呼んでいるのは、こうした類の修行者であり、(9)第一一段には、その生活を「ある山里」に見だし、「心細くすみなしたる庵」のありさまとして同情的に描き出している。(10)第九八段に引かれている『一言芳談』は、兼好以前の、そうした隠遁的浄土教的生活を送る人々の種々相を伝えている。」

(7)に「後世」が二度使われているのは、「後世知らぬ人」が言ったことに対して用いられているので、単純に兼好自身の浄土教信仰とは結び付けられない。

(8)「長明の『方丈記』～」については確かにそうであり、本書の先駆者として無視できない存在ではある。

(9)の「第一一段」は「神無月のころ、」で始まる段で、ある山里の庵をうらやむ内容であり、「同情的」という評価は適当ではない。

(10)の『一言芳談』については、「人々の種々相を伝えている」という表現は適切ではない。

六 『方丈記』との関連検証

ここでは、本書と類似した表現が見られる『方丈記』の文をとりあげる。

「ただわが身を奴婢とするにはしかず。

いかが奴婢とするとならば、もしなすべき事あれば、すなはちおのが身を使ふ。たゆからずしもあらねど、人をしたかへ、人をかへりみするよりやすし。もし歩くべき事あれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍牛車と心を悩ますにはしかず。今、一身をわかちて二つの用をなす。手の奴、足の乗り物、よくわが心にかなへり。身、心の苦しみを知れば、苦しむ時は休めつ。まめなれば使ふ。使ふとても、たびたび過ぐさず。もの憂しとても、心を動かす事なし。いかにいはむや、常に歩き、常に働くは、養性なるべし。なんぞいたづらに休みをらん。人を悩ます、罪業なり。いかが他の力を借るべき。衣食のたぐひ、また同じ。藤の衣、麻のふすま、得るにしたがひて、肌をかくし、野辺のおはぎ、峰の木の実、わづかに命を継ぐばかりなり。人に交らざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなる報をあまくす。惣て、かやうの楽しみ、富める人に対して言ふにはあらず。ただわが身ひとつにとりて、昔今とをなぞらふるばかりなり。」(『方丈記』)

ここは、『方丈記』の作者、鴨長明が、世間の人は人のために家を作るが、自分は自分のためだけに家を作るのであり、従者もいない。自分を従者(「奴碑」とする)のが、一番だ、という内容の後に続く部分である。

問題となるのは傍線部である。衣食は粗末なもので足りるといった内容であるが、これと『徒然草』の本段を比較してみたい。

「紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、藜のあつもの、いくばくか人の費をなさん。求むる所はやすく、その心はやく足りぬべし。」(『徒然草』)

「藤の衣、麻のふすま、得るにしたがひて、肌をかくし、野辺のおはぎ、峰の木の実、わづかに命を継ぐばかりなり。」(『方丈記』)

格別に説明の必要もなく、非常に類似していることがあきらかである。時間の流れから言えば、兼好が長明の表現に触発された、もしくは模倣したということになる。兼好は本書の中で、『源

氏物語』や『枕草子』、さらには『方丈記』とは記していないが、「鴨長明の『四季物語』」という表現はあるので、直接触発された可能性はある。もしそうでなくても、中世の隠遁者の生活が、一般的にこのようなものであったということ、またそのような決意をもって隠遁したと考えてよいだろう。

したがって五の「(6)兼好の内に、そういう遁世生活の経験を多少でも経た自信があったからに違いない。」と言う評価は考え直してしかるべきと思う。具体的な「自信」というよりは、観念的な「把握（理解）」である可能性が高いからである。

ちなみに島内裕子氏は、その著書（『徒然草』）の中で、本段について、「徒然草の中に『方丈記』という書名は出てこないが、まるで、兼好が『方丈記』の読後感を記したような書き方である」と述べている。

七 本段の再検討

本書は、基本的に、各段の配列順に書かれた可能性が高いとされている。それを前提に、本段の再検討を試みる。本段よりも前に、「仏道心」を中心としてとりあげた段は、『注釈』にも記されていたが、第四九段がそれにあたる。以下、全文を掲げる。

第四九段

老来りて、はじめて道を行ぜんと待つことなかれ。古き墳、多くはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ちにこの世を去らんとする時にこそ、はじめて過ぎぬるかたのあやまれる事は知らるなれ。あやまりといふは、他の事にあらず、速かにすべき事をゆるくし、ゆるくすべきことを急ぎで、過ぎにしことの悔しきなり。その時悔ゆとも、かひあらんや。

人はただ、無常の身に迫りぬる事を心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり。さらば、などかこの世の濁りも薄く、仏道をつとむる心もまめやかならざらん。

「昔ありける聖は、人來りて自他の要事をいふ時、答へて言はく、今火急の事ありて、既に朝夕にせまれりとして、耳をふたぎて念仏して、つひに往生を遂げけり」と、禪林の十因に侍り。心戒といひける聖は、あまりにこの世のかりそめなる事を思ひて、しづかについゑけることだになく、常はうずくまりてのみぞありける。

『全集』注には次のように記す。「特に前段の部分は情感的な発想と異なる、断言的な自己主張となっている。文章もまた、明晰な漢文訓読語の現在法となっている。」

第五六段

久しく隔りて逢ひたる人の、我が方にありつる事、かずかず残りなく語りつづくこそ、あいなけれ。隔てなくなれぬる人も、ほどへて見るは、はづかしからぬかは。つぎさまの人は、あからさまに立ち出でて、今日ありつる事とて、息もつぎあへず語り興ずるぞかし。よき人の物語するは、人あまたあれど、ひとりに向きて言ふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中にうち出でて、見ることのやうに語りなせば、皆同じく笑ひののしる、いとらうがはし。をかしき事を言ひても、いたく興ぜぬと、興なき事を言ひても、よく笑ふにぞ、品のほど計られぬべき。

人のみざまのよしあし、才ある人はその事など定めあへるに、おのが身をひきかけて言ひ出でたる、いとわびし。

『全集』注には次のように記す。「『徒然草の「よき人」は身分もすぐれ、教養にしろ人品にしる積極的に評価できる人物である。兼好は、しばしばこの「よき人」を証人として、自己主張を行っているが、この段もその一例である。兼好の評価の基準の一面が、この事実にも、かいまみられよう。」

第五七段

人の語り出でたる歌物語の、歌のわるきこそ本意なけれ。少しその道知らん人は、いみじと思ひては語らじ。

すべて、いとも知らぬ道の物語したる、かたはらいたく、聞きにくし。

『全集』注には次のように記す。「歌物語の焦点となる歌がよくないのを批判しているだけではない。兼好にとって、「和歌こそなほをかきものなれ」(十四段)であり、和歌は失われつつあった貴族文化の最後の残影であったことに留意したい。またここには同時に、専門の道を尊重する意識がはっきりうち出されている。」

第五九段

大事を思ひたたん人は、去りがたく、心にかからん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。「しばし、この事はてて」、「おなじくはかの事沙汰しおきて」、「しかしかの事、人の嘲りやあらん、行く末難なくしたためまうけて」、「年来もあればこそあれ、その事待たん、ほどあらじ。もの騒がしからぬやうに」など思はんには、えさらぬ事のみいとどかさなりて、事の尽くるかぎりもなく、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう、人を見るに、少し心あるきはは、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。

近き火などに逃ぐる人は、「しばし」と言ふ。身を助けんとすれば、恥をも顧みず、財をも捨てて遁れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の来る事は、水火の攻むるよりも速かに、遁れがたきものを、その時、老いたる親、いときなき子、君の恩、人の情、捨てがたしとて捨てざらんや。

『全集』注には次のように記す。「前段の、出家人に対する同情的な配慮に続いて、この段では出家を發心するにあたっての決定的な条件、「諸縁放下」の徹底が説かれる。つまり、「一大事」である。文章も漢文訓読体に近い、現在法の強調表現で、説示的な主張になってくる。」

第五八段は、第四九段という発想が前提にあり、それが第五六段・第五七段の、具体的な人物の、発言の無節操さに不快感から怒りまで覚えた兼好が第五八段をまとめ、さらに感情的な第五八段から、レベルアップした、第五九段へとつながるといふ有機的関連を持っているのであって、これを別々にとらえたのでは、本書の活きたとらえ方とは言えないだろう。

さかのぼれば、第三八段（「名利に使はれて〜」）の人生論が、彼の、人生への再出發となった段であり、それがここまで影響を及ぼしているということを付記しておく。

八 結論

本稿で取り上げた第五八段は、冒頭の「道心あらば、〜」と発言した「後世知らぬ人」に対しての具体的な反論から生まれた。第一段落は感情的である。第二段落はそこから、出家という「かたち」をとることの重要性を述べる。この段には『方丈記』に酷似している部分が見られた。第

三段落は、本段の主題である「人と生まれたらんしるしには、いかにもして世を遁れんことこそ、あらまほしけれ。」を導いている。

本段は確かに感情的な書き出しなのであるが、観念的な第四九段がなければ描けないものであり、また、観念的な「出家」への思いが、本段で実感を持ったということが言える。

また第五六段は、「よき人」と対照的な、自己中心的な「知りあい」を否定して「おのが身をひきかけて言ひ出でたる、いとわびし。」という結論を導いている。この流れが第五七段を経て本段につながっている。

第五七段は、「歌物語」であるが、後半の「すべて、いとも知らぬ道の物語したる、かたはらいたく、聞きにくし。」という結論をあげ、それが直接本段につながるものとして考えたい。

第五八段は、さらに第五九段へとつづく。冒頭の「大事を思ひ立たん人は、去りがたく、心にかからん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。」を導くのである。第五九段は、出家の必要性を、具体例をあげながら、鋭く主張しているが、本段の成立には、それまでに書かれたものの存在が大きく関わっていると結論づけたい。

なお本稿ではとりあげなかったが、さらに続く第六〇段もこれら一連の出家礼賛段としてとらえることも可能である。

参考文献

- 『徒然草』 永積安明（小学館・日本古典文学全集）
- 『徒然草全注釈』 安良岡康作（角川書店）
- 『徒然草総索引』 時枝誠記（至文堂）
- 『徒然草』 島内裕子（ちくま学芸文庫）
- 『方丈記』 山田孝雄（岩波文庫）